



Title	Association between cerebral small vessel diseases and mild parkinsonian signs in the elderly with vascular risk factors
Author(s)	旗手, 淳
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61620
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨
Synopsis of Thesis

氏 名 Name	旗手 淳
論文題名 Title	Association between cerebral small vessel diseases and mild parkinsonian signs in the elderly with vascular risk factors (血管危険因子を有する高齢者における、脳小血管病と軽度パーキンソン徴候の関連)
論文内容の要旨 〔目 的(Purpose)〕 血管危険因子を有する高齢者において、軽度パーキンソン徴候(MPS)と、脳小血管病(SVD)及びSVD全体の負荷との関連を調査することが本研究の目的である。 〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕 血管危険因子を有しているが、パーキンソニズムや認知症は発症していない患者 268 人(平均年齢 71.0±7.8 歳)に対する横断研究を行なった。MPSは、UPDRS Part III にて評価した。頭部MRIを用いて、SVD(脳微小出血[CMBs]、ラクナ梗塞[LIs]、白質病変[WMH])を測定した。各SVDの特徴の存在は、total SVD scoreによって示す。年齢、性別、脳卒中の既往、高血圧、糖尿病、脂質異常症を調整して、ロジスティック回帰分析を行なった。 〔総 括(Conclusion)〕 多変量解析にて、CMBs、深部のCMBs、混合性(基底核と視床に併発)のLIs、脳室周囲高信号域(PVH)、深部白質高信号域(DWMH)、total SVD scoreは有意にMPSと関連していた一方で、脳葉に限定したCMBs、基底核や視床に限定したLIsとの関連は認めなかった。CMBsを構成する各カテゴリーのうち、姿勢歩行機能は混合性のLIs、PVH、DWMH、Total SVD scoreと、固縮はPVHと、寡動は混合性のLIsとの関連していた。更に高齢の群(73歳以上)のみを対象とした解析でも、total SVD score、深部のCMBs、混合性のLIs、PVHとMPSとの関連は残っていた。 この結果より、CMBsを含めたSVDと特にSVD全体の負荷はMPSのサロゲートマーカーになり、機序として高血圧性細小血管障害の寄与が支持される可能性がある。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 旗手 淳			
論文審査担当者		(職)	氏 名
	主 査	大阪大学教授	望月 秀樹
	副 査	大阪大学教授	坂田 泰史
	副 査	大阪大学教授	山下 俊英

論文審査の結果の要旨

血管危険因子を有する高齢群において、軽度パーキンソン徴候(MPS)と脳小血管病(SVD)(微小出血[CMBs]、ラクナ梗塞[LIIs]、白質病変[WMHs])やSVDの重症度との関連を調査することが研究目的である。

パーキンソニズムや認知症のない、268人を対象とした横断研究で、MPSはUPDRS PartIIIを用いて評価した。SVDは頭部MRI検査を用いて、CMBsやLIIsの局在、脳室周囲白質高信号域[PVH]、深部白質高信号域[DWMH]を評価し、各所見を点数化して合計したTotal SVDスコアを用いてSVDの重症度を評価した。年齢、性別、脳卒中の既往、高血圧、糖尿病、脂質異常症を含めた血管危険因子を調整し、ロジスティック回帰分析でMPSとSVDの関連を調査した。

深部領域のCMBs、基底核と視床のLIIs、重度のPVHとDWMH、Total SVDスコアが、MPSと有意に関連していた。またUPDRS PartIIIの各カテゴリー(寡動、振戦、筋強剛、姿勢反射障害)との関連を調査すると、基底核と視床のLIIs、重度のPVH、重度のDWMHとSVDスコアの合計が姿勢反射障害と、重度のPVHが筋強剛と、混合のLIIsが寡動と有意に関連していた。

SVDの局在やTotal SVDスコアはMPSのサロゲートマーカーとなり、機序として高血圧性細小血管障害の関与が示唆された。高血圧などSVDの危険因子に介入することで、MPSさらには運動機能障害の予防につながる事が示唆された。

以上、本論文は臨床上有用であると評価し、学位に値すると考える。